2022年（令和4年）
4月20日第398号

あんしん Vol 398

発行 株式会社 安藤プロパン

〒955-0095
三条市代官島川原271
TEL. 34-7656(代)
FAX. 35-6326

あんしん取材班が行く

土生田焼窯元 石田一平さんを訪ねて

田上町の土生田焼（はにゅうだやき）の窯元、石田一平さんの作陶展が3月19日(土)～23日(水)、加茂市仲町のうのもりや2階の〝山内堂〟で開催された。白い陶器に粒状の模様の入った「滴（しずく）シリーズ」を中心に展示。壁には「陶画」が飾られており独特の雰囲気を漂わせている。

会場には次々に来場者が訪ずれて石田さんは作品の説明をしていた。

土生田焼の窯元は田上町の中店（なかだな）にある。田上駅から徒歩10分程のところ。石田一平さんの父親である初代石田甚五郎氏が昭和四十七年に田上の地で創始。二代目の石田一平氏は短大を卒業しサラリーマンを目指していたが、昭和五〇年初代の仕事場と展示室が火災に遭い、焼け跡に呆然と立っていた初代の姿をみて救いの言葉をかけたのが陶芸家として歩むきっかけとなった。

その後、京都の国立陶磁器試験所に入り三年間腕を磨く。初代の他界後独立し、本年は開窯五十年の節目の年に当たる。

会場には和紙に筆で書かれたメッセージが貼られていた。『護摩堂山の麓 その四季おりなす人間の想像を超越した自然の変化は心たのしく幻想の世界へと誘ってくれます。その幻想の世界を彷徨し茶陶としての創造は其の独特の風あいと味わいを心に内色なしてくれます。

真紅な炎の中より生れ出たその極みをとくとごらん頂き手どりの感触使いこなす自由さをおたのしみ下さい

土生田焼石田一平』

会場に、開窯五十年を記念し初代石田甚五郎氏の茶碗二点を所有者から借り受け特別に展示した。

初代石田甚五郎氏は京都の陶芸家、宮本東山のもとで11歳から修業し、荒川豊蔵（人間国宝）などの先輩に鍛えられて陶芸家となり、東宮御所造営にもかかわった。

石田一平さんの今回の「滴シリーズ」は白の長石釉を使い焼成によって土の素地に比べ長石釉の方がより大きく縮む性質を利用し、表面に凸凹した釉薬の粒の「梅花皮（かいらぎ）」を生み出し、それを無数に発生させることで1個1個の粒を「滴」に見せたもの。

後日、石田一平氏の窯元及びギャラリーを訪ねた。位置的には田上駅から東へ約八百メートル位のところ。どっしりとしたコンクリート住宅である。ギャラリーはご自宅の玄関の右手にある。数多くの陶器がずらりと展示されている。色々な作品が目を楽しませてくれる。

窯は現在修理中のため見学することはできなかった。窯の広さは陶器が300ケ入る大きさで、大人が中に入って正座ができる程。作品を窯に入れて850度で素焼きし、色を入れ1230度で22時間から24時間焼く。100コ焼き上がっても本人が納得して世に出せる作品は30コ位だという。

国道403号線バイパス道の駅〝たがみ〟でも石田一平さんの作品コーナーがあり、それを見て窯元のギャラリーを訪ねて来る人も居る。

陶芸教室の講師もつとめており、新潟市南区、五泉市、田上町の自治体の カルチャー教室で陶芸の指導にあたっている。

又、田上町の教育委員を10年間つとめられ今年度11年めに入った。『子どもの成長と焼きものの成長を楽しみにつとめています』とニッコリ。

▶ギャラリー 山内堂

▶会場の石田一平さん

▶作陶中の写真

▶自宅の玄関で

▶自宅ギャラリー

▶自宅、窯元全景

▶道の駅〝たがみ〟

今月のクイズ

Q〈ツルカメ算〉ツルとカメを合わせて、頭の数は20、足の数は58です。ツルとカメはそれぞれいくつでしょうか？

Vol 396の答 3匹（時計を表そう）

当選者 ▼田浦健治さん ▼堀雅志さん ▼渡邉宏子さん ▼富田真理子さん ▼鳥羽猛さん

▶オモテ
63
〒955-0095 三条市代官島川原271 (株)安藤プロパン あんしんクイズ係

▶ウラ
・クイズの答
・氏名・住所
・年令・おつとめ先
・メッセージ

しめきり 6月10日

小田信雄さん（農家）から投稿頂きました！

食料の争奪戦始まる

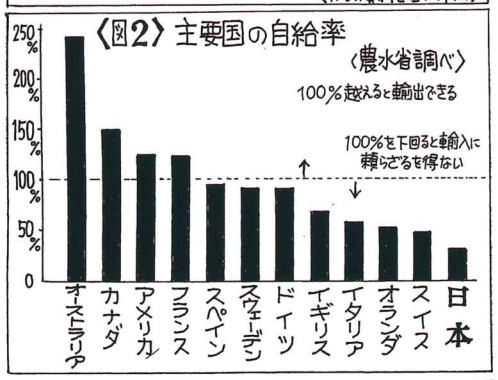
南区百姓　小田信雄

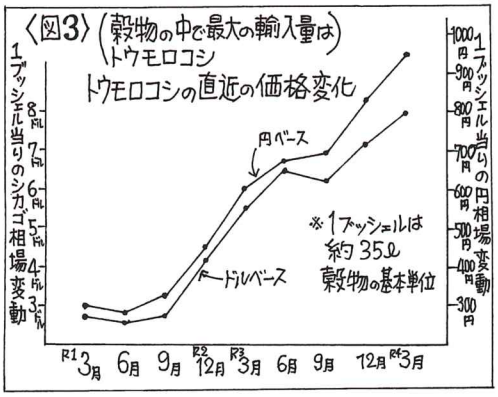
2月24日突如ロシアがウクライナに軍事侵攻を開始しました。世界中の人々が驚きとともにこれから予測される最悪の事態に恐れ戦きました。3年に及ぶコロナウイルスの痛手から何とか立ち直ろうとしていた矢先、その何倍ものダメージを受けることになりました。

この軍事侵攻は原油、ガスなどのエネルギーの高騰、金融を始め、海上航空などさまざまな部品供給のサプライチェーンに至るまで、世界経済の大混乱を招き、お陰で庶民の日常生活は大パニックになっています。まさに狂ったプーチン大統領と言わざるを得ません。

ここで改めて生きるために大事な食糧（食料ではなく食糧と表現）、毎日の食事に目を向けてみます。4月1日から麺類やパン類、食料油、砂糖、食肉、果ては鮭、鱒の魚介類に至るまで一斉に値上があったり、店頭におけつる包装の量目が減りました。米、小麦などの麦類、トウモロコシ、大豆などの基本穀類は近年世界的な異常気象による不作やエタノール仕向け、中国のなりふり構わぬ買い占めなどの影響で直近3年間のシカゴ相場は値上がりの一途をたどってきました。（図1参照）

その上に今回ロシアの暴挙が拍車をかけ、食料輸入大国日本の食卓だけに止まらず世界中に深刻な食料不安を引き起こしています。特に小麦が深刻です。多くの奥様方が小麦粉を材料とした商品の大幅な値上げを感じています。





いるはずです。日本は小麦の90%を輸入に頼り、価格安定維持のため製粉元売り会社への卸値を農林水産省が一定の期間ごとに決定するシステムです。そのお陰で一年間での40%も値上がりをしました。この大手製粉会社は6月中旬にさらに大幅な消費者価格の値上げを決定しています。家計への負担は一層厳しいものになって行きます。

ウクライナは世界最大級の農業国であり穀物の大輸出国でもあります。国土の真ん中を流れる大河ドニエプル川が肥沃な農地を育み小麦は世界5位の生産量、ヒマワリとヒマワリ油は世界一の産出、その他ジャガイモ、家禽などいずれも莫大な生産量と輸出量を誇っている国です。そのウクライナの都市といわず、農村農地に至るまで国中がロシアの砲弾と爆弾と戦車によって破壊されています。この時期は秋蒔きの小麦が青々と生育を始める季節ですが、トラクターの燃料もなく不発弾だらけの畑では農作業どころではありません。春播き小麦の種子さえ満足にないとの情報もあります。

まず今年の大幅な減産は必死です。さらに昨年産の小麦はサイロに貯蔵されていますが、黒海沿岸の港はロシアによって封鎖され外国への積み出しができません。この秋までにアメリカ、カナダ、オーストラリア、ブラジルなどの基本穀物の産地の作況に異変が生じると想像もつかない飢餓状態に世界が陥る恐れがあります。

軍事侵攻が始まってわずか1ケ月半でウクライナの小麦に頼っていた中東各国やアフリカ諸国の多くがパンを得る事が困難になってしまいました。価格の暴騰と相俟って貧困の国々の食料不足と飢餓は深刻です。4月10日、この食料不足と飢餓の現状解決に対しWTOは、新たな国際的取り組みに着手するよう緊急声明を出しています。

「急げ食糧安全保障」

凄惨な状況のウクライナは7,000キロ先の出来事ではありません。パンを食べられなくなったのは中東やアフリカの国々だけではない。我が国の明日の姿かも知れません。日本の食品は間違いなくまだまだ値上がりを続けます。金さえあれば世界中から何でも手に入るという効率第一主義の食糧政策はその根底の揺らぐ時が、この戦争で一挙に来たのかもしれない。日本は約15年間カロリーベースでの食糧自給率は40%を下回り、直近では37%と先進国の中ではダントツ最下位です。（図2参照）

食品は1割不足すると値段は倍近くに上昇します。仮に半分の胃袋しか賄うことのできない状態では金の力は0に等しくなり、恐ろしい飢餓地獄となります。我が国も過去何回かこの飢餓状態を経験しているのですが、喉元過ぎれば熱さ忘れるの譬えの通り平々凡々と過ごしています。有史以来国家存立の基本は『国民の胃袋を満たす』です。最近地政学的な防衛の安全保障は大きく取り上げられますが、急変する国際状況と異常気象下においての食糧生産に配慮し、国の挙げての食糧安全保障議論を期待します。